

自分たちの未来に目を向けさせる取り組みの実践報告  
—グローバル人材への成長を目指して—

An approach to make students aware of their future  
-aiming to be globally minded human resources-

村上真理\*

Mari MURAKAMI

The objective of this paper is to present one approach to cultivate students' awareness toward globally minded human resources in high school English classes.

The author also introduces one refreshing approach inspired by activities such as script reading, expecting students to have a positive attitude toward oral reading in English.

Key words: globally minded human resources, oral reading

1. はじめに

本稿は、新たに有権者となる若い人たちの政治や選挙への関心を高め、政治的教養を育む教育の充実のために総務省と文部科学省の連携により作成された『私たちが拓く日本の未来』(生徒用副教材、教師用指導資料) [1] の指針に対応すべく、筆者の担当科目である総合英語 A において 1 年生 3 クラスを対象にした、憲法記念日に向けての日本国憲法前文の日本語と英語群読の実践を報告するものである。

2. 目的と背景

朝のホームルームや休み時間の後、学生に勉強モードに切り替えさせるのはなかなか難しいものである。総合英語の授業開始時にはそれまでに学習した部分の復習に教科書本文の一斉音読をするが、ここで授業への気持ちの切り替えと確実な復習活動ができるように、この活動を勢いのあるものにしたいと常に思うとともに、教科書本文や英文の音読が意義あるものだと実感して授業後の復習や自主的な英語学習の中で英文音読を習慣化させる指導を検討し続けている。

そのような折、年度当初に選挙権年齢等の満 18 歳以上への引下げに対応し、学校現場における政治や選挙等に関

する学習の内容の一層の充実を図るため、『私たちが拓く日本の未来』が会議で紹介されるとともに、あらためて教育基本法の理念である「我が国の伝統と文化を基盤として国際社会を生きる日本人の育成」を目指した指導検討の案内がなされた。この選挙では憲法改正の是非が争点のひとつとなっていたが、そもそもこの年代の子供たちは憲法を真剣に読んだことがあるのだろうか、そして憲法に関心を持たせるために英語教員にはどんな指導ができるのだろうかと考えるなか、筆者の所属する会の発行書である『みんなの群読脚本集』 [2] に日本国憲法前文を扱った脚本があったことを思い出し、これを参考に英語の脚本を作り、音読の活性化と国際社会を生きる日本人を育てることの 2 つを目指した活動を考えついた。

この発想は「グローバル人材育成」、「グローバル教育」という言葉が教育界をにぎわせるようになって久しく、これが日本の英語教育の目標に関しても同様であることに基づく。英語力をつけることが「グローバルな日本人」になることではなく、また「グローバル人材」とは異文化に対する理解と自国文化と歴史の知識を土台にした日本人としてのアイデンティティを持った人々だと筆者はとらえている。このような国際社会を生きられる人を目指そうとする意識を育むことと語学学習に対する意欲や関心の向上に、自分の生まれ育った国の憲法を一部でも英語で言えたという達成感を与えることがよい効果をもたらすことを期待したのである。

\* 沼津工業高等専門学校 教養科

Numazu National College of Technology, Liberal Arts

### 3. 実践の概要

#### 3. 1 群読について

群読とはみんなで声を出して読み合う「声の文化活動」と定義されている。その特徴はまとまりのある文章などを分担して読む分読にある。実際に読むときには呼吸を合わせて全員の声が入り合うようにし、また次の人が読みやすいような読み方を心掛け、次の読み手はリズムを保ちながらそれまでの感情や感慨を引き継いで読む。こうして連携し協力する力を養い、さらには表現力や創造性、自主性といった多様な力を育てるものである。そしてさらに自身の経験から、非常に緊張感と集中力が必要とされる活動であると捉えられる。

#### 3. 2 導入の手順

実践は憲法記念日に向けて、授業を担当する1年生3クラスを対象に行った。この時期の授業は中学校と違った形態や教科担当教員に対する緊張感もあり、堅苦しい雰囲気の中で進む。そして群読に関しても学生は1年生である。そこで授業開始時には「声を出しあう文化的な活動をしましょう。楽しく抑揚のある音読ができるようになるために大切な活動です」と呼びかけてから「まもなく憲法記念日を迎えます。皆さんは憲法を読んだことがありますか」と付け加えて、『みんなの群読脚本集』にある日本国憲法前文を扱った脚本を用いて群読の楽しさを覚え、声が出るようになることを授業づくりのはじめの目標に据えた。回を重ねて慣れてきたところで「皆さんはグローバル化する世界を生きる日本人です。自分が生きている日本の憲法を英語で言えたらいいですね。どのような英語になっているでしょう」と促して英語の群読に移っていった。日常読んだり話したりすることのない内容を英語で言うのであるから、かなり難しい活動だろうという意識から気持ちが委縮して声が小さくならないように、初めに中学校で勉強した英文法が用いられた部分を憲法前文の英文の中から取り出して復習して、今までに獲得した英語の知識で容易に理解できることを実感させてから原文と照らし合わせて少し高尚な語彙や表現を獲得することに興味を持たせて音と意味を結びつけていった。こうして授業開始に「声の文化活動をしましょう」と呼びかけて英語の群読を続けた。

#### 3. 3 脚本作りの留意点

群読の脚本の作り方に決まった手順はなく、さまざまな脚本に用いられた技法を参考にして、焦点を当てたい部分にあわせた独自の脚本を作ることになる。そこで英文の脚本は各台詞が意味を意識して一気に言える長さとなることに留意して4グループ用にし、各文の出だしが弱々しく

ならないように文頭を全員が読む部分に、また最後の英文を盛り上げるように2番目からのグループの担当部分に前からの読み手が次々に加わっていくようにして台詞がすすむごとに読み手の数を増やして音量を大きくし、感情を高めて先に繋げて最後の3と4番目のグループの台詞である「恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存するため」を全員で繰り返して強調して締めくくる形にした。

#### 4. 実践を通して

実践のきっかけおよびねらいのひとつは群読によって授業開始時の音読を活性化させることであったので、日本語で群読の面白さを知ることからスタートしたが、そこで声を出して声を合わせることに楽しさを感じている様子が見られた。

年度初めは新1年生には行事が多くて慌ただしくクラスのみとまりが出来上がっていない。しかし声を出しあう活動はこういった弊害を取り除く対策の一つとなることが見て取れ、ことばの持つ力をあらためて実感したと同時に語学を教える側には期待を与えられた。

また英語と日本語それぞれの最終群読の後に、平常の音読活動である一人でもまったものを読むときと比べて①良い緊張感があったか、②集中力を感じたか、③声が出ていたか、④読むことに楽しさ(おもしろさや心地よさ等)を感じたかといったことの簡単なアンケートを実施しているが(表1、2を参照)、そこから感じられることは次のようなことである。

群読に慣れ親しむ雰囲気にあっても英語の群読になると緊張感と集中力が高まるようであることがうかがえる。活動時の雰囲気を思い起こすと、この高まりは英語を使うことに対する緊張というよりも既習の文法や表現法を提示したことで習ったことが使える機会が身近にあふれていることに気づき、それらを使えるものになろうとする1年生ならではの新鮮で素直な態度によるものであると筆者自身には受け止められる。

表1 日本語での群読

質問項目	人数(人)	比率(%)
良い緊張感があった	45	35.7
集中していると感じた	56	44.5
声が出ていた	98	76.3
楽しさ、面白さ、心地よさを感じた	84	72.2

表2 英語での群読

質問項目	人数 (人)	比率 (%)
良い緊張感があった	57	45.2
集中していると感じた	62	49.2
声が出ていた	62	49.2
楽しさ、面白さ、心地よさを感じた	52	41

## 参考文献

- [1] 総務省、文部科学省著『私たちが拓く日本の未来』(生徒用副教材、教師用指導資料), (2027)
- [2] 重水健介編・脚色: 『みんなの群読脚本集』, pp.148-149, 高文研, (2013).

## 5. おわりに

今回の報告は実践するに至った背景から、日本国憲法前文を使った群読の紹介に留まるが、実践の中で感じ取られた集中力と積極性の高まりに注目し、現在は教科書の本文の音読を日本語と英語の二人読みの活動にするだけではなく教科書教材を文法ポイントや覚えたい語彙に焦点を当てた、また一方通行の授業ではなく学習者主体の授業となるように練習問題の解答を促す指示も台詞にした会話形式の脚本にアレンジして、それらを声を出して幾度も読み合うことで語法や語彙の定着を図っている。このような教科書教材を用いた教材づくりや語学指導に取り組むのは筆者自身に初めてのことであり、また参考となる脚本も少なく脚本作りは容易ではないが、学生の協調性と楽しく脚本を読み合ったり台詞や英文を暗唱する姿勢が見られること、定期試験の解答に英文の型や語彙の定着が見られてきたことに充実感を得ている。今後もこういった学生の反応から脚本の作り方の留意点やアイデアをつかんで教材の作成に活かして、学生の英語運用能力の向上に結び付く指導を継続したいと考えている。したがって学生の英語学習に対する変容や英語運用能力の定着等の報告は次の機会にゆだねることとする。

さいごに、上級生を対象にして日本国憲法を扱った英語の群読を特別活動等の中で実践してはどうかと考えている。それは世界語である英語に対する関心を高める活動となるとともに、教育界のキャッチフレーズともいえる「グローバル人材の育成」に向けた対応のひとつとして、自国文化と歴史の知識を土台にした日本人としてのアイデンティティを育む活動になるのではないかとの思いからである。

## (資料 1 : 日本語による群読脚本)

- 全員 日本国憲法前文より  
 全員 日本国民は  
 A 恒久の平和を念願し、  
 B 人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、  
 C 平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して  
 全員 われらの安全と生存を保持しようと決意した。  
 全員 決意した。  
 全員 われらは、  
 A 平和を維持し、  
 B 専制と隷従、  
 C 圧迫と偏狭を  
 D 地上から永遠に除去しようと努めてゐる国際社会において、  
 全員 名誉ある地位を占めたいと思ふ。  
 全員 われらは、  
 A 全世界の国民が、  
 +B ひとしく恐怖と欠乏から免れ、  
 +C 平和のうちに生存する権利を有することを確認する。  
 全員 確認する。

## (資料 2 : 英語による群読脚本)

- 全員 from Preamble of the Constitution of Japan  
 全員 We, the Japanese people, desire peace  
 A for all time  
 全員 and are deeply conscious of the high ideals  
 A controlling human relationship,  
 全員 and we have determined to preserve  
 B our security and existence,  
 C trusting in the justice  
 D and faith of the peace-loving peoples of the world.  
 全員 We desire to occupy an honored place  
 A in an international society  
 B striving for the preservation of peace,  
 C and the banishment of tyranny and slavery,  
 D oppression and intolerance  
 全員 for all time from the earth.  
 A We recognize that  
 +B all peoples of the world have the right  
 +C to live in peace,  
 +D free from fear and want.  
 全員 to live in peace, free from fear and want